

マルホ皮膚科セミナー

2011年6月2日放送

第62回日本皮膚科学会西部支部学術大会①

「大会を振り返って」

川崎医科大学 皮膚科教授
藤本 亘

はじめに

第62回日本皮膚科学会西部支部学術大会は昨年、2010年10月23日、24日の2日間、岡山県倉敷市の倉敷市芸文館および倉敷市立美術館を会場として開催いたしました。基礎から臨床まで全領域にわたって皮膚科学の“Art(技:わざ)”を理解し、これを駆使できるようになるには日々のたゆまぬ努力が必要である、という意味を込めてテーマを“Art of Dermatology”とし、シンポジウム、セミナーを企画しました。

国際交流招請講演・特別講演

国際交流招請講演はインド、Grant Medical College の Oberai 名誉教授により”Skin diseases seen more in the Indian Continent”と題するテーマでご講演をいただきました。インドには「あらゆる皮膚疾患」がみられるがとりわけ皮膚結核、菌腫、ハンセン病、リーシュマニア症など本邦で遭遇することが稀な感染症が非常に多いこと(図1)、ハンセン病については、2009年には1万人あたりの有病率がWHOの目標である1を切り、0.72まで低下していることが報告されました(図2)。



図1 a. 尋常性狼瘡 b. 皮膚疣状結核
c. 菌腫(マズラ菌症) d. ハンセン病(多菌型) e. ハンセン病(多菌型)
(Oberai 名誉教授のご厚意による)

Leprosy Prevalence in 1981 & 2009

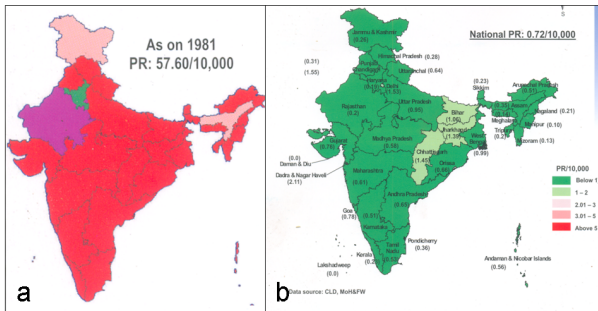


図2 インドにおけるハンセン病の有病率と分布

a. 1981年の有病率と分布

b. 2009年の有病率と分布

(Oberai 名誉教授のご厚意による)

Oberai 先生のご講演は生活習慣による接触皮膚炎、皮膚がんなどユニークな皮膚疾患の解説にとどまらず、インドの歴史的建造物や世界遺産についても多数紹介され、国際交流にふさわしいご講演であったと思います (図3)。

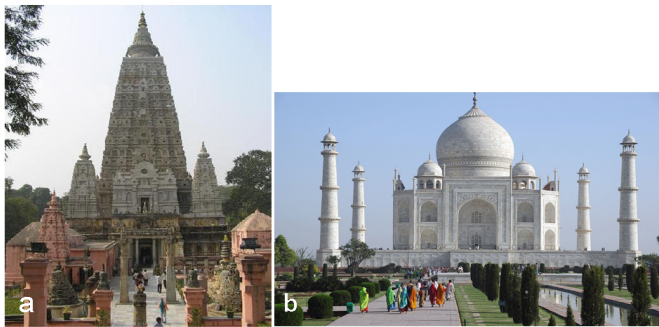


図3 インドの旧跡

a. 仏教の聖地 ブッダガヤ

b. タージ・マハル

(Oberai 名誉教授のご厚意による)

特別講演は英国 St.John's Institute of Dermatology の Nestle 教授に”Psoriasis: From genes to function and targeted therapy”と題してご講演をいただきました。Nestle 教授からは、乾癬発症の免疫機序に関する解説がなされ、乾癬病変部での、”IL23/Th17 axis” 説を紹介され、ついで疾患感受性遺伝子として IL23 受容体の遺伝子多型が Th17 細胞の機能に影響を与え、これが乾癬発症に関与する可能性を示され、最後に、生物学的製剤、ことに IL23 を構成する IL12p40 に対する抗体であるウステキヌマブが重症乾癬の治療に有用であることを報告されました。国内ではちょうど 2010 年1月に抗 TNF α 阻害薬であるレミケード、ヒュミラが乾癬の治療薬として保険適応となり、本年になりウステキヌマブも乾癬治療薬として保険収載されましたので、Nestle 教授のご講演は我々皮膚科医が乾癬の病態と治療法をアップデートするには絶好の機会となったと思います。

教育講演・シンポジウム・CPC

教育講演とシンポジウムは私自身が皮膚科医となって以来関心を持ち続けている領域からいくつかのテーマを選んで企画しました。まず、木沢記念病院の北島康雄先生から「記憶でなく論理で分かる皮疹と病理組織の新しい動的診かた」と題する講演をいただきました。皮膚疾患の診断に際して最も重要な情報である「皮疹」がどのような動的・時間的経過で成立するのかを病理組織的所見から解き明かす、という壮大な内容で、北島先生が皮膚科医となって以来、日々の診療を通して今日に至るまで考え続けてこられたことの集大成であると思います。ご講演の内容は **Visual Dermatology**、9巻、12号に特集号として出版されていますのでぜひ手にとって一読していただければと思います¹⁾。我々が日ごろ何気なく疑問をもちながら、しかし、**Lever** の **Histopathology of the skin** にも明確に記載されていないため、置き去りにしてきた疑問点の数々が北島先生によってパズルを解くように解説されており、まさに「目から鱗」の感慨をおぼえる方が多いと思います。北島先生の教育講演に続いて、CPC を企画しました。今回の CPC は各施設から病理標本を提出していただく形式を採用せず、真鍋俊明先生、山元 修教授におオーガナイザーとなっていただき、5名の講師の先生がたからそれぞれ異なるテーマでの講演をお願いいたしました。皮膚科専門医を目指す先生がたには大変有益なご講演をいただけたと思っています。

さて本学会の準備を開始した 2009 年に私どもは急速進行性間質性肺炎を伴う皮膚筋炎の患者を診療していました。膠原病を専門とする内科の先生ともども努力いたしましたがこの患者を救命することができませんでした。文献を渉猟し、何人かのエキスパートの先生に直接お話しをきいても、この疾患に対する対処の方法に統一した見解がないことに気づき、シンポジウム 1 として「間質性肺炎を伴う皮膚筋炎」というテーマをとりあげることにしたわけです。金沢大学の竹原教授と川崎医大内科の柏原教授にオーガナイザーをお願いし、金沢大学の濱口先生、慶応義塾大学リウマチ内科の桑名先生、愛知医科大学の山村先生からそれぞれ皮疹の特徴、特異自己抗体、および治療法についてご講演いただきました。間質性肺炎を伴う皮膚筋炎は筋症状を欠く **amyopathic dermatomyositis** の患者に高率にみられることが知られていたわけですが、**amyopathic dermatomyositis** の患者では抗 **CADM-140** 抗体陽性例が多く、抗 **CADM-140** 抗体陽性例の 90%以上の間質性肺炎が認められるということです。皮膚筋炎の診療に際しては初診時に皮疹の特徴と特異抗体の結果から予後を推測できるため、特に抗 **CADM-140** 抗体陽性例に対しては間質性肺炎に対し初期から積極的な免疫抑制療法を行うべきとのコンセンサスが得られたと思います。

シンポジウム 2 で「抗酸菌感染症 2010」をとりあげた理由にはふたつあり、一つは乾癬に対する抗 **TNF α** 阻害薬の使用が普及し、今後皮膚結核に遭遇する機会が増えるかもしれない、ということ、二つ目は、私自身が過去に経験し *Mycobacterium marinum* として報告していた症例が実は *Mycobacterium ulcerans subsp. shinshuense* ではなか

ったか、というささやかな疑問です。国立感染症研究所の石井先生、琉球大学の上里教授にオーガナイザーをお願いし、石井先生、国立国際医療センターの四津先生、鳥取大学の渡邊先生からご講演をいただき、抗酸菌感染症の診断と治療、動向や分類についてアップデートしていただけたと思います。

ついで話題を自己免疫性水疱症に移します。天疱瘡については2009年から大量免疫グロブリン静注療法が天疱瘡治療薬として保険適応となり、難治例への対応が随分楽になりました。また天疱瘡の重症度評価法である **Pemphigus Disease Area Index(PDAI)** が2010年には我が国の天疱瘡診療ガイドラインにも取り上げられました。このような背景からシンポジウム3として「自己免疫性水疱症の診断・治療 2010」を企画しました。久留米大学の橋本教授、慶応大学の天谷教授にオーガナイザーをお願いし、慶応大学の石井先生、岡山大学の青山先生、と久留米大学の橋本教授から講演をいただきました。また、このシンポジウムの前に「リツキシマブ」による治療経験の豊富なドイツ **Philipps University of Marburg** の **Eming** 先生から教育講演2として「**B cell directed therapy for inflammatory skin diseases**」と題する講演をいただきました。「リツキシマブ」は欧米ではすでに重症の自己免疫水疱症の治療に用いられており、本剤に起因する重篤な副作用は稀であり、今後、我が国でも使用される機会が増えると思われま。また関連する内容として教育講演3は理化学研究所の堀先生に「制御性 T 細胞による免疫制御」と題して主に自己免疫寛容における **Treg, Foxp3** の意義を解説していただきました。

おわりに

大会を終え、参加人数はおよそ 850 名であったことを知りました。また、学会初日は天気にも恵まれアイビースクエアでの懇親会では日本皮膚科学会西部支部として新たに設置された「西日本皮膚科」雑誌賞の第1回受賞者の発表も行われ、無事終了することができました。お世話になりました関係各位には心から感謝申し上げます。本年3月の東日本大震災後、私たちの暮らし方を見直したほうが良いのではないかと誰しも感じておられると思います。大会2日目に旭川医大健康科学講座の吉田貴彦教授から「砒素の功罪」、東北大学大学院環境科学研究科の石田秀輝教授から「鳥の眼で観る地球環境とものづくり・くらしかた」というテーマで招請講演をおこなっていただいた理由は私たちの「地球環境を考えるため」でした¹⁾。大会終了後、石田先生のご講演に大変感銘を受けたというお葉書を何人かの方からいただきました。皮膚科医としてではなく、ひとりの人間として地球環境とどのように関わってゆくか、これからの生き方が問われる時代に入っていると思います。

文献

- 1) 石田秀輝、自然に学ぶ粋なテクノロジー、化学同人、2009年1月